

## 「銀屋町、東古川町の町名復活に寄せて」

原田 博二

平成十九年一月九日長崎市古川町の一部が、江戸時代からの町名「銀屋町」と「東古川町」に改称された。

この二つの町は、昭和三十八年の町界町名の変更で、古川町と改称されたので、両町にとって待望の旧町名への復活であった。

元亀元年（一五七〇）長崎がポルトガル貿易港として決まると、翌年ポルトガル船が初めて入港し現在の万才町のほぼ全域に、横瀬浦町、外浦町、分知町、島原町、大村町、平戸町の六町が造成されている。

その後も町の造成は相次ぎ、この六町の北側には、博多商人末次興善が興善町を、さらにその北側には豊後町、桜町、六町の東側には築町、下町

が、西側には樺島町、五島町と造成が行われ、大体江戸時代の初めころには銀屋町なども造成され、町数は六十六町に、さらに、寛文十二年（一六七二）には

東古川町などが造成され、その町数は八十町となった。ところが、前述のように昭和三十七年に「住居表示に関する法律」が公布され、同三十八年から十三次にわたる町界町名の変更によって、同四十一年銀屋町は古川町と鍛冶屋町に、東古川町は古川町とそれぞれ町名が改称されていた。



東古川町奉納踊（昭和7年）

東古川町などが造成され、その町数は八十町となった。ところが、前述のように昭和三十七年に「住居表示に関する法律」が公布され、同三十八年から十三次にわたる町界町名の変更によって、同四十一年銀屋町は古川町と鍛冶屋町に、東古川町は古川町とそれぞれ町名が改称されていた。

この八十町から出島町、丸山町、寄合町の三町を除くと七十七町、七で割ると十一町、現在でも踊町は七年毎に廻ってくるが、これは寛文十二年以来のことで、踊町を済ませて四年後には諏訪神社や御旅所の世話をする年番町が廻って来て、さらに、その三年後に本番の踊町が廻って来るが、この踊町と年番町の制度がくちを支えてきたわけである。

しかし、昭和三十八年以降の町界町名の変更によって、当時の踊町四十一が他の町名に変更され、無くなってしまっている。

さらに、江戸時代の長崎の町は、他の都市でも見られるように、道路をはさんで、町界が背中合せとなった路線式の町割りであったが、これもこの町界町名の変更にもない、現在の街区方式に変更されている。

この時、当時の踊町の内四十一もの町が無くなったわけであるから、くちの踊町のローテーションが大きくくずれることとなったのである。

さらに、この街区方式の導入により、道路の向かい側は、それまでは同じ町内であったものが、以後は他の町ということにもなり、地域のコミュニティ活動にも大きな変化を来すこととなった。

しかし、このようななかで、磨屋地区の多くの自治会は、銀屋町自治会、東古川親和会、紺屋通り自治会、諏訪通り町会などの名称で自治会を組織、現在でもかつての踊町単位の活動を行ってきたのである。

また、当時、町界町名の対象外地区であった桶屋町、今博多町、古町、大井手町などは、町界町名の変更が実施されないまま、現在に至っている。このように自治会の変更に殆どなかった。

このようなか、平成十七年五月十七日に銀屋町自治会が、同年七月十七日に東古川親和会がそれぞれ金沢市の例を参考に銀屋町や東古川町の旧町界町名の復活について陳情したのである。そして、その主な理由として、自治会活動や奉納踊などは、「従来どおり銀屋町や東古川町の町名で行っており、それぞれの町にとって町名は心の支え、町の誇り」としてい

ると言うことであった。そして、この二つの町は、四十年にわたって独自に自治会活動を進めて来たことが、町の実体として認められ、町名はもとより町界も以前の旧町界のとおりに変更される事になったのである。この事は今後の「長崎くんち」を考える上から銀屋町、東古川町の旧町名への復活は大いに意義あることと思われる。

（長崎歴史文化博物館研究所長）

ところで、長崎の町の成立、さらには町名について考えてみると、それは、長崎諏訪神社の秋の大祭（くんち）と密接な関係がある。

長崎くんちで踊を奉納する町は、踊町とよばれる。踊町の順番は、明暦年間ころ、当時の長崎の町が六十六あったが、この六十六の内、出島町、丸山町、寄合町の三町を除いた六十三町を二十一町ずつの三組に分けて、三年に一巡ということにしていた。出島町は、当時はオランダ人だけが居住する町であるから、奉納踊は無理という。次に丸山町と寄合町は遊女町であるから毎年出さないというわけである。

その後、明暦元年（一六五五）には六十三町を六分し、今年は十一町、翌年は十町、翌々年は十一町ということに変更、それに丸山町と寄合町が加わるわけであるから、合計すると今年は十三町、翌年は十二町、翌々年は十三町の奉納とされた。

ところが、寛文三年（一六六三）三月八日、筑後町より出火した火災は、折からの大風にあおられ、たちまちの内に五十七の町と、二、九〇〇戸も

の人家を焼きつくした。其のとき焼失を免れたのは、わずかに出島町、今町、金屋町の三町のみであったので、長崎の町は壊滅的な被害に見舞われたのである。

これが長崎における史上最大の火災、寛文の大火である。この大火後、幕府は長崎の町の復興に取り掛かり、道路や街並の規格を整備するなど、長崎の町に新しい都市計画が実施されている。

そして、この長崎の復興政策のなかで、幕府が目指したのは、長崎の町数をそれまでの六十六にするのではなく、八十にすることであった。

そのために、寛文十二年（一六七二）浜町や筑後町、紺屋町などのように大きい町は、東浜町と西浜町に、筑後町は上筑後町と下筑後町、紺屋町は今紺屋町と中紺屋町というようにそれぞれ二町に分割、古川町はもつと大きい町ということで、本古川町、東古川町、西古川町と三町に分割されるなど、長崎の町は八十の町数となった。

### 風信

○今年度の「長崎ランタン・フェスティバル（燈会）」好評裡に終了しましたと御挨拶があった。関係の方々のご苦労もさる事ながら、燈会を見にこられた方々より「長崎の人達は皆さん本当に親切なんですね」と残された言葉は、私には本当にうれしかった。

○天草市教育委員会より長山一幸・平田豊弘両氏の来訪あり、世界遺産に申請中の長崎キリシタン教会遺跡に天草のキリシタン遺跡も加えられないかと言う事であった。この時、私は不図・北原白秋の「白秋と共に」とまりし天草の大江の宿は伴天連の宿」を思い出していた。

○先日、長崎県指定文化財「長崎清水寺本堂修理・第一期修理完了報告会」に出席、文化財保存技官の來本雅之・瀬尾雅之両先生より今年度予定の本堂解体による新発見の各種資料についての解説をお聞きした。「寛文八年申六月」の墨書が記されていた「斗」。「元和四年」在銘の十二神將。三間四面を中心とし唐様の構造を持った本堂様式とのこと等々であった。

○最後に一月御住職より清水寺の保存修理完成は平成二十二年二月末であり、総工費は約四億五千万はかゝりますので皆様方の御協力を戴ければ、との事であった。私達は長崎県に残された文化財保存のため「出来る限りの御協力は致しましょう」と申し上げた。一月御住職は私に「本堂の瓦一枚でも御縁を戴ければ」と笑顔で話しかけて下さった。

○先日、長崎料理の話に依頼され出かけたが、冬にキュウリやカボチャを食べる現在の食生活の中では、私の話は「全くの昔がたり」であった。

○医博で衆議員であられる富岡勉先生来訪あり、前回出版した「海のシルクロード」好評でしたので加筆重版しましたと、「重版書」を持ってきて下さった。私は第一章の長崎とベトナムの史話よりも、現在のベトナム社会主義共和国に於ける「医療と介護」についての論評に強く心ひかれて読ませて戴いた（昭英出版刊・一〇〇〇円）

○東京で有名な喜多迅鷹先生より長崎の街の風景を水彩写生された絵葉書十二枚を戴いた。そこには、なにげなく長崎の街かどが写生してあり、旧長崎医大正門の坂道、新大工町と川端の教会、路面電車などくく風景があった。長崎観光関係の方々には此のような絵葉書のある事ご承知でしたでしょうか。

長崎歴史文化協会研究室

TEL 八二二一五四〇  
十八銀行公会堂前出張所 二F

